ビジネスに活かす

7カ国語表現辞典

日商岩井広報室
《トレードピア編集部》編著

ビジネスに活かす

7カ国語表現辞典

日商岩井広報室
《トレードピア編集部》編著

ビジネス
に活かす

7カ国語表現辞典

昭和58年8月25日　初版第1刷発行
昭和58年12月10日　初版第4刷発行

編著者　日商岩井㈱広報室《トレードピア編集部》
©1983
発行者　増田義和

発行所　㈱実業之日本社
本社　〒104 東京都中央区銀座1—3—9
電話　(編集) 03(535)2371
(営業) 03(535)4441
振替　東京1—326
関西支局　〒530 大阪市北区曽根崎2—17—7
梅田第一ビル
電話　06(312)1573～5

印刷　東京研文社・浅野印刷
製本　共文堂

Printed in Japan　0580—606110—3214

はしがき

日常生活で何気なく使っていることばや慣用句を外国語ではなんと言うのだろう――この単純なアイデアからこの本が誕生しました。

本書は，日商岩井が発行する月刊誌『トレードピア』の創刊号から最近号までの誌上に連載した「世界のことば」のほぼ全項目をまとめたものです。

『トレードピア』は，1970年10月に創刊した月刊のＰＲ誌で，総合商社が編集するユニークな国際情報誌として各方面から評価をいただけるようになりました。とくに国際的視点からの特集企画，総合商社の全世界に広がる海外ネットワークを活用した海外情報の収集や国際調査などは総合商社ならではの企画として好評を得ております。

なかでも「世界のことば」と，世界各国で生活している海外駐在員から送られてくるレポートで構成した「ワールド・レポート」は創刊号から続いている企画であり，ともに読者皆様の人気を二分しています。

本書では一つの“ことば”を日本語のほか６カ国語で比較していますが，その執筆は全員が日商岩井の社員です。このため，内容は決して学問的なものではなく，むしろエッセイ風なものとなっています。テーマによっては，ピッタリとした訳語が見つからず，首をかしげるものもあるかもしれません。

しかし，企画のねらいは「これを外国語でなんと言うのか」というよりも，そのことばを通して文化の違いや生活習慣の違いなどを際立たせることにおいてきました。

商社マンとして，ビジネスの場やプライベートな形で各国の人たちと付き合っていることを考えると，言語の専門家ではありませんが，生きたことばを書き記すにはむしろ適任といえるのではないでしょうか。

『トレードピア』は今年で創刊満14年目を迎えます。その間，多くの読者の皆様から「世界のことば」を単行本にまとめてほしいとのご希望が寄せられました。編集部としては，素人が書いたものを単行本として世に問うのは一種の気恥ずかしさがありますが，読者の皆様の温かいご支援と実業之日本社の第六出版部長上間克彦氏の熱心な励ましに意を強くして出版に踏み切ったしだいです。

国際化時代ということが強調されますが，これは外国との交流の機会が増えてきたということであり，いつ，どこで外国人と話すとも限らない時代にいるわけです。また，貿易立国日本としては世界のどの国とも積極的に交流を深めていくことが大切です。世界の国々から日本に対して正しい理解を得ると同時に，わたくしたちも外国をよく知ることが必要です。

こういう時代に，本書が少しでも世界の人々の生活ぶり，物の考え方を知る上での手がかりとして，また皆様の知的好奇心の刺激となれば望外の幸せです。

昭和58年７月

日商岩井株式会社広報室
『トレードピア』編集部

はしがき
自　由…… 6
色　気…… 8
手料理……10
かつら……12
断　絶……14
け　ち……16
もしもし……18
引越し……20
窮鼠猫を嚙む……22
八百長……24
花より団子……26
仲　人……28
おべっか……30
野　暮……32
お　盆……34
一か八か……36
十八番……38
御不浄……40
いちゃもん……42
鯖を読む……44
おめでとう……46
なるほど……48
こんにちは、さようなら……50
はじめまして……52
どうぞ……54
すみません……56
いただきます、ごちそうさま……58
まあまあ……60
どうも……62
いってらっしゃい、ただいま……64
じゃあね……66
よろしく……68
月とすっぽん……70
生き馬の目を抜く……72

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

虻蜂とらず……74
狸寝入り……76
馬が合う……78
鶴の一声……80
虎の子……82
やじ馬……84
猫も杓子も……86
馬脚をあらわす……88
鵜の目鷹の目……90
蛇の道は蛇……92
はしゃぐ……94
月並み……96
四苦八苦……98
惚れる……100
まる儲け……102
へそくる……104
有頂天……106
いなす……108
ちんぷんかんぷん……110
しゃれる……112
だれる……114
二の足を踏む……116
かかあ天下……118
べっぴん……120
いなせ……122
玉の輿……124
色気より食気……126
美人薄命……128
おきゃん……130
英雄色を好む……132
かまとと……134
粋……136
万　歳……138
生真面目……140
愚　図……142

呑　気…… 144
尻込み…… 146
意固地…… 148
出鱈目…… 150
滅茶苦茶…… 152
後　釜…… 154
気　質…… 156
伊　達…… 158
一　寸…… 160
顔が広い…… 162
頭にくる…… 164
足を出す…… 166
耳が痛い…… 168
目をかける…… 170
口をきく…… 172
鼻につく…… 174
舌を巻く…… 176
手が早い…… 178
腹が太い…… 180
背を向ける…… 182
あごを出す…… 184
カマをかける…… 186
ゲタをあずける…… 188
コクがある…… 190
ゴロがいい…… 192
タカをくくる…… 194
ドジをふむ…… 196
ハクをつける…… 198
ボロを出す…… 200
ヤマをかける…… 202
イタにつく…… 204
イロをつける…… 206
ケリをつける…… 208
ほくそえむ…… 210
八つ当たり…… 212

血迷う…… 214
へいちゃら…… 216
胸騒ぎ…… 218
照れくさい…… 220
やるせない…… 222
取り越し苦労…… 224
面食らう…… 226
首ったけ…… 228
むせぶ…… 230
むきになる…… 232

対談　日本語の国際化は経済大国日本の必須条件…… 234
猿谷　要・鈴木孝夫

索　引…… 241

装丁・レイアウト　石曽根昭子
イラスト　種村　国夫

《世界のことば執筆者》

日本語　小堀鉄男　古賀武陽　志野祥司

英語　茂木　宏　伊藤延男　社本専一　石本　笙　檜垣成義

ドイツ語　鬼塚通敬　大竹　有　棚橋健一　信長洋司　池田　悟　永井安宅

フランス語　木村正明　富山金太郎　内藤邦彦

スペイン語　黒飛　勇　清田政彦　伊藤　勇　加藤隆英　三堀悦郎　応武善登　軽部　孝

中国語　四方浩二　三浦弘吉　辻　誠　東海林清　高橋　朗　藤田恵美

ロシア語　内藤　操　中村達意

日本語

自由

『広辞苑』によると，自由とは「心のままであること。思う通り。自在。他からの拘束，束縛，強制，支配を受けないこと」をいう。わが日本には，いま自由がハンランしているようだ。選択の自由，自由恋愛，フリーセックス，ウーマン・リヴ……。自由国家アメリカでさえ，自由日本にくらべれば不自由の烙印を押されかねない。「板垣死すとも自由は死せず」以来，日本の自由はとどまるところを知らぬまでに成長をつづけてきた。しかし，いま日本人はどれほど「自由」を意識し，「自由」を愛し，自由を守る信念をもっているだろうか？現代の自由をもっともエンジョイしているだろう若者のほとんどは不自由の時代を知らないのだが，そのような若者がふえて行くにつれて，自由のもつ価値は相対的に低下して行くのではないだろうか？

英語

フリーダム freedom

「歩行者天国」(Pedestrian's paradise) などと，昨今，都会人は，ほんの束の間でも，車からの解放感に「自由」(freedom, liberty) の片鱗を味わっているようだ。すなわち "car-free mall on Sundays" は交通戦争の休戦時間帯ともいえよう。

終戦後，10カ月近く，日俘集中営に抑留されたが，このキャンプでは「個人的自由」personal liberty は大幅に制限され，待望の引揚船によじのぼった時のよろこびはいまだに忘れられない。島を脱出した人もいたらしいが，もし射たれていたら —— He prized freedom more than life.——だが首尾は知る由もない。戦後，日本には「自由」が氾濫し，往々にして「放縦」(self-indulgence; looseness) とはきちがえられた。「自我」(ego) 主張のあまり，他を顧みぬ風潮が，精神公害や犯罪の原因となってはいないだろうか。戦後は終ったといわれる今日の日本には「4つの自由」(The Four Freedoms: freedom of religion, freedom from want, and freedom from fear) が享受され "Car-free Sundays" どころか "Carefree days" が到来して欲しいものだ。

ドイツ語

フライハイト Freiheit

中世の共同市場であったハンザ同盟の諸都市のうち，今日なおブレーメン，ハンブルグ，リューベックの三都市は Freie Hansestadt（自由ハンザ都市）の呼称を都市名に冠しているが，これは当時教会の支配より脱し Unabhängigkeit（自主独立）を標榜したもの。第2次大戦後，ソ連地区にあった由緒あるベルリン大学がコミュニストの Parteischule と化したことに肯えんせず，Akademische Freiheit（大学の自由）のために有志が集まり西ベルリンに創ったのが Freie Universität…ベルリン自由大学……という。この Freiheit も Unabhängigkeit を意味する。同じ Freiheit といっても西と東では意味するところが異なり，東では sozialistische（上昇主義的）Freiheit という。フランス革命がもたらした Liberalismus（自由主義）の世紀も1914年に終りを告げ，経済活動に対する国の干渉がみられるようになる。エアハルト教授の Soziale Marktwirtschaft（社会的市場経済）の政策も Freie Wirtschaf（自由経済）の建前をとっているが，ある程度政府による舵取りの必要も認めている。これが Sozial の修飾語がついているゆえん。

フランス語

liberté（リベルテ）

乞食をするならセーヌのほとりがよい。舞子さんが京の町をカッポしているように，セーヌを背景に悠々と日なたぼっこをしていればよい。時時ちょうだいする1フラン貨幣には「自由・平等・友愛」の大革命の標語が輝いて，あなたの自由を祝福するようだし，素寒貧だから放縦 licence（リサンス）に流れることもなく，自由の厳しさが身にしみて快い。子供達はフランス共和国の République は res publica「皆のもの」という意味だと学校で教わっているから乞食にだって石をぶっつけたりしない。国家公務員が不当に乞食の自由を侵害すれば公権剝奪の厳罰が課せられる。共和国とはそういうものなのである。

大統領になっても共和国の軍人は公僕として質素な葬儀を受けて死んでいく。彼もそれで満足なのである。ブドー酒とパンは安く，ケチなフランス人だが慈悲心は厚い。セーヌのほとりの乞食程良いものはない。しかし自由を享受するためには他人に頼らぬことが，indépendance（アンデパンダンス）が不可欠である。乞食は独立しているようであってそうではない。やはりセーヌのほとりでも乞食はよした方がよい。

スペイン語

libertad（リベルター）

1469年 Aragón 王国の Ferdinand 王と Castilla の Isabella 女王の結婚で，南スペインの Granada を残す，現スペイン全土が統合され新王国が誕生するまで，Iberia 半島は多くの異民族に相次ぎ占拠され闘争が絶えず，自由（libertad）を謳歌できた世代はなかったと思われる。

スペインの統治下にあった新大陸に於ても，民衆は奴隷化され自由は与えられなかった。Bolivar や San Martin 等の Libertador（解放者）によって，3世紀以上ものスペインの圧制より脱却して，10世紀の初め独立した Hispano-Americano 諸国も，また一部特権階級や彼等と密接な関係をもつ国際企業に政治経済の実権を握られ，一般民衆は自由を享受できなかった。

最近これらの国々の左傾化を心配されているが，Hispano-Americano 諸国のこうした政治的な動きは，自由を求めての第2の独立運動とみるべきだと思う。

これら発展途上国が過去の歴史をくり返し，大きな犠牲を払うことなく平和裡に目的を達成，秩序ある自由を獲得できるよう，先進諸国の協力を期待したい。

中国語

自由（ヅー ユウ）

中国では，自由という語は，紀元前からあり，自在，随意，心のまま，他の束縛をうけない，といった意味で用いられておりました。後漢書には，威福自由（いきおいほしいままなり）とか，百事自由といった言葉があり，焦仲卿の妻君は汝豈得自由と切々と唱っています。

Freedom や Liberty の訳語としては19世紀末から用いられており，毛沢東主席は“人類の歴史は，必然の王国から自由の王国へとたえまなく発展していく歴史である”“自然科学は，人々が自由をかちとるための武装力である”と述べています。また中国の憲法では，“わが国の各民族はすでに団結して自由で平和な民族の一大家庭をつくっている”と謳い，言論，出版，集会，結社，信仰などの自由を保障しています。

さて，自由主義となると，現代中国では，あまり歓迎されないようで，毛主席は自由主義を11種に分類して，“活動を消極的にし，団結をゆるめ，意見の一致をもたらす一種の腐蝕剤である”と規定しています。

左翼にも右翼にも属さず，政治性文学に反対する人を“自由人”といいます。

ロシア語

ВОЛЯ（ヴォーリャ）

たいへんなテーマを持ちだしたものだ。「自由」はロシア語に二種あり，ひとつは ВОЛЯ（ヴォーリャ），もうひとつは СВОБОДА（スヴァボーダ）だ。ヴォーリャとはまず意思である。次に自由であり，それが転じてシャバとなる。つまり，意思あるところ自由ありというわけ。この自由意思が本来の姿を示している所がシャバで，本来の姿を束縛される所が監獄。ロシア語では，だから自由ということばは抑圧とかっちり対になっていると思わなければならぬ。19世紀の革命結社の名に「土地と自由（ヴォーリャ）」というのがあったことはあまりにも有名。「土地と自由をよこせ，その意思はてこでも貫くぞ」というわけである。次にもうひとつのことばスヴァボーダだが，チェコの大統領名と同じもの，これは「しばりつけているものをゆるめる」ということと，あるいは「ゆるめたままにしてあるもの」ということで，しばしば「空いているもの」「あけてあるもの」を意味する。「空き部屋」の「空き」に対し「空き婦人」というのもある。これを空閨ゆえのよろめき婦人と心得れば大過なかろう。

日本語

色気

「色気」というたら，なんちうてもおなごのもんどすなァ。ほれに，京女のことばは，なんや知らん辛気くそうて，甘えたみたいにおすけど，たんとの殿御はんは「色気あるなァ」とお言やすえ。

そやかて，ウチらかて殿御はんにはころッと……，なんちうのどす，フィーリングとかいわはりますなァ，感じることがあるのどすえ。例えば，気張って仕事をおしやす人……，野心のあるお人，アレ，そういうたら，野心のあることを「色気を示す」とおいやすなァ。そやけど，この「色気」はウチらの「色気」とは大違い，ちょっといやらしいわ。いやらしいといいながら，フィーリングやなんて，ウチもけったいな(妙な)おなごどすなァ。

ほんまにそういうたら，日本語ちう言葉はむつかしおす。こうやって京都のおなごの言葉で書いても，しょうもない（つまらない）し，だいじな京言葉のお色気がおわかりやすには，発音せんとあかへんし，大抵やおへんわ。

英語

sex appeal; it
（セックス アピール イット）

「色気」はあたる英語をさがしたら，『英語にならない日本語』（最所フミ女史著）に "sex appeal" とあり，"That actor has no sex appeal." という文例がある。女形が女よりも女らしい色気で観客を魅するときは，"Good actors are more feminine than women would be."——といえよう。

ザラにいるとは思えぬが，sexy, juicy, voluptuous, amorous, coquettish, seductive などのうち，余りにも性過剰なヒビキのある言葉はいただけない。『米語入門』（竹中治郎氏著）では，「性的魅力」を "it" で表わしている。「イット女優」で名をはせたメイ・ウエストを思い出すのは中老，若い人ならマリリン・モンローを "it", "glamorous" と連想するだろう。「色気」に近い英語としては，attractiveness, beauty, charms, fascination, soft fancy, sexiness, tender passion etc. etc. ニュアンスに富む名詞があるが，男にとって「アピールするのは必ずしも sexのみならず」，さらに "Beauty is but skin-deep." の古い諺に学ぶべし。要するに，女性の心の泉からわき出る楚々たるお色気（graceful charms）こそ常に男性が憧れるもののようだ。

ドイツ語

Entzückend
（エントツュッケント）

どこの国でも少女は美しいもので，ドイツでも straff gespannte Pfirsichäutchen（桃のような肌）や Schmalreh（のろ鹿）のごときシルエットとともに，その unschuldig（あどけなさ）が賛美される。一方 unscheinbar（目立たない）な女が女性の Reiz（魅力）をもっていることも多いし，すでに青春の Schmelz（若々しさ）を失ってもなお attraktiv（魅力的）な40代の女性もいる。しかし色気というと erotische Anziehungskraft すなわち sex-appeal をともなう。さらに日本語の色気には単的な性的魅力という表現にはないなにか「ほのかさ」を感じさせるものがある。この点はまさに日本的で，優雅に欠けるととかくいわれるドイツ人の情緒にはないもののように思う。anmutig（上品な）とは勿論異なるが，さりとて wollüstig（肉感的）の強烈さはなく，kokett（こびる）ともニュアンスは異なり，Zierpuppe（おしゃれ）でもなし üppig（はで）な生活からくる Schlamperei（くずれた女）とも異なる。いわば性的魅力に美と，さらに上品さも加えたようなものか。一語でいうならアムールにも通ずる意味合いを含んだ entzückend になろう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

フランス語

L'air provocant

“色気とは何か“ を定義するのは非常に難しいようである。それはまず色気を感じる側の個人差によって大きく左右され，同一人物でもその年齢により，また同一人物の同じ年齢に於てもその時の体調や周囲の環境によって感じる時と感じない時があるから不思議である。出張先の Auberge（オベルジュ＝ホテルより格が落ちる宿屋）で会った femme de ménage（ファンム ドゥ メナージュ）のヒップに l'air provocant を感じたかと思えば，夏の Saint Tropez（サン トロペ）で Monokini（モノキニ）の女性群に囲まれてもブタマン2ヶにしか見えない時もある。

女性の色気にあてられてメロメロになる事を être captivé par les charmes d'une femme. と言う。captiver はとりこにするという動詞，女性は自ら発散する色気によって対象物をとりこに出来るのだからやはり偉大である。彼女達にはLancer des œillades（ランセデ ズイヤードゥ＝色目を使う）という武器がある事を常に頭に入れておき，たとえ色目を使われたと思っても，うぬぼれる前に自分の顔を鏡で見るくらいの用心をしないと長い人生何回とりこになるか分らない。とりこになるのが嫌いな男性軍のためにトルコがあるという説も。

スペイン語

seducción

seducir 異性の関心を引きつけ，魅惑するという意の動詞から出た名詞。したがって，色気たっぷりの女性の事を seductora という。類型的にはオッパイがトンガリ帽子のごとく突き出て胸元からあふれ出そうなこと，おヒップが後ろにハチキレそうに突き出ていること，さらに足のきれいなことが不可欠の3条件。

つまり，来るときはオッパイから先に到着し，行くときはお尻が一番あとに残るタイプ。顔の良し悪しは二の次。背の大小，目や髪の色の違いは好き好きということになるらしい。スペイン系は一般に足が細いから，美人コンテストでは太い足に人気が集まるのが日本と対象的。柳腰というのは嫌われるが，もちろん清楚な魅力というものは存在するし，それが，若き男性が女性に要求する結婚の条件でもある。

上記の男性型 seductor というのは，色気のある男性という意味ではなく，策を弄して相手を籠絡する人物，つまり策士の意味に使われる。

中国語

艶美

色気にあたる語は色情ですが，口語としては使われず，“あの女は色気がある”というときは，“她很艶美”とか，もっと一般的には，“她真迷人”とか，“她引誘人家”といいます。若い娘なら春心，春色とかで，春心初動，色気が出てきたなどの表現もあります。

媚眼（色眼）を使ったり，情信（恋文）を書く度が過ぎると好色といわれるし，風流子弟とか風月中人といえば，いっぱしの色男，色鬼とか色狼ともなればもはや色気狂いです。

往時，美人を傾城といい傾国というのは，楊貴妃はじめ幾多の美人が王朝を倒したことを思えば肯けましょう。彼らの色気の探究は極めて熱心で，ついには纏足という異様な官能美が一般化されるにいたりました。ヨチヨチ歩く姿を見その繃帯を解いて甘酸っぱい匂いを嗅ぐことから彼らの夜は始まったそうです。そして，その異常な色気は捨て，婦人を解放することから，中国は自由への第一歩を踏み出した訳です。

ロシア語

сексуальный
аппетит

「きょうね，むすめさんに会ったよ！」

「へえェ，むすめさんにねェー」ことのほどさように，「むすめさん」は少ないということだ。めったなことでは娘さんには会えない。つまり女らしい色気のある人には，めったにお目にかかるわけにいかない，というのが現代ソビエト・ロシアの世相である。そこへもって来てロシアには，お色気にずばり相当することばがない。sexual appetite はロシア風に сексуальный аппетит といいかえることはできても，肝心のお色気はいっこうに感じさせてくれない。類似のことば кокетка（coquette），флирт（flirt）が英，独，仏語なみにあることはあるが，それとてあの寛容で甘美な「お色気」という日本語の味からひどく遠い。ロシア語のお色気は文化現象というよりは生理的心的現象であるようだ。だから，外来語を借用してまにあわせるということになるだろう。浮世絵という полнография もロシア人にかかっては目のかたきだ。

日本語

手料理

クイモノを作ることを，なぜ「料理」というのか？「料」とは材料の「料」でもあり，「糧食」の「糧」の変化ともとれる。しからば「理」は道理の「理」，すなわち，ことわりの意味と解すべきか。とすれば，だんだんクイモノとは関係がなくなってくる。

長年連れそった女房の手料理つくるサマを，見るともなくながめていると，ただもう手っとり早いというだけで，料が糧(かて)，理がことわりなどと，屁理屈ならべたてる段階は昔話。こっちの舌の方が女房の味つけに馴らされてしまった按配である。

だがしかし，手っとり早いということは家庭料理，つまり手料理には不可欠の要素でもある。宮づかえの亭主が，無駄な時間を過ごさず，平穏無事に朝な夕なにチカタン会社づとめができるのも，女房の手料理のたまものというべきだ。

そういえば「料理」とは手順の良さをいうのではあるまいか，と思ってつまんだ茄子のヌカミソのうまかったこと。やはり手料理とは糟糠の妻の手料理であるべきである。

英語

home cooking（ホーム クッキング）
home-made dishes（ホームメード ディシェズ）

ボンベイにいたとき，パーシーの家庭に下宿し，三食付きでお世話になった。欧風に近い生活だったが，食事はさすがのお国ぶりでからい家庭料理(home cooking)を十二分にいただいた。脱単調のため，家主さんを家族ぐるみさそって週末の夕食は，よく中華料理店に行ったものだ。その後，3年余りサンパウロでずっとホテル住いをしたが，朝食以外はすべて外食で，欧風，中華料理，日本料理，そしてブラジル式と昼も夜もマメにレストランめぐりを繰り返した。その店独特のmenu, special dishesがあり，美味を求めて遠近を問わず探索したものだ。ホテルに住めば，そこに家庭の雰囲気を欲し，家にあれば，ホテルのサービスを求めるのが人間の気ままとか。

よくブラジル人の家庭に招待いただき，温かい情のこもった奥さんの「手料理」(food personally prepared by Mrs.—; home-made dishes)をご馳走になり「手作り」のクッキー(home-made cookies)とcaféを味わいつつ，一夕楽しくおしゃべりした後などは，ホテルへ帰るのがうとましくなる。home-madeといいhand-madeといい，心のこもった料理こそほんものの味だ。

ドイツ語

Haus (macher) kost（ハオス（マッハー）コスト）

人間が食料(Nahrungsmittel)を保存するすべてを学ばなかったら，とっくに餓死していたかもしれない。野菜や果物を乾燥(trocknen)し，肉や魚を燻製に(räuchern)したり塩づけ(salzen)にすることは古くから行なわれていた。今日ドイツ人の食生活に不可欠のソーセージ(Wurst)やハム(Schinken)のごとき保存食品も長い冬のきびしさやたび重なるいくさの経験から生れたものといえよう。このような加工食品がドイツの家庭での食卓の中心となっている。

戦後，共稼ぎがふえ，食生活のパターンが変ったとはいえ，いまなおkalte Speise(冷たい食事)と称し，夕食にはパン(Schwarz-Graubrot)と好みのソーセージ(この種類たるや500をこえるといわれる)ですませる家庭が多い。ポテト(Kartoffel)料理の種類も豊富で，食事の主要素ではあるにしても「ジャガイモが主食だ」というのは誤り。倹約が身についているので，昼の温かい食事Warmes Essen)のときも一品料理(Eintopfgericht)主義が多い。要するにドイツ人は，昔から美食家(Feinschmecker)ではなく合理的な生活に根をおろした料理がその特徴といえよう。

フランス語

cuisine familiale

16世紀末「ナントの勅令」によって，宗教戦争を終結に導いたアンリ4世という鼻柱の強い名君がいた。全人民が毎日曜日に鍋に鶏を入れることができるようにと願っていた，という伝説があるほど人民に愛された人だったが，ラヴァイヤックという狂信の徒に暗殺されてしまった。鶏ばかりじゃたまらないと怒り心頭に発しての凶行ではないか，という笑話があるが，これは物資豊かな現代の笑い話で，一昔前のフランス人は鶏がご馳走だったほど質素であった。

今でも，一般家庭の食事は質素で，たとえばジャガイモを細く切って揚げただけのfritesの出来の良否が食卓の話題になる。熱いカリカリ，ホカホカのフリットは素晴らしく美味しく，レストラン側でもChez Mireille（ミレイユ宅）とかChez Elle（彼女ところ）といった店名をつけ，手料理の味を売物にして客寄せをする。デザートで素晴らしいのはcrêpeという鉄板で焼いた薄いお菓子で，夕暮，これに洋酒をかけて点火し，青い炎が立ち昇るのをみると，まことにcuisineという語はラテン語のcocina（焼く，煮る）という言葉からきたのだと実感される。

スペイン語

comida casera

現実にはむしろNo de Restaurante レストランのではないとか，あるいはおばあさん伝来のとかいった風にいわれる。中産階級のわずかなスペイン語圏諸国では，料理は女中のするものという観念が支配的で，一般の関心は低いから美味な手料理は都会では少なく田舎に多い。

有名なPaellaともあるいはArros con Pollo a la Valencianaともいうピラフはスペイン本国でも，来客のときのご馳走で日常のものではない由。

地域を問わず，牛肉の塩だけのステーキ，豆と豚あるいは野菜と肉の煮込みといったパターンに，各地のローカルな変化が盛られる。変ったところでは，コスタリカの穿山甲のトマト煮，グワテマラのイグァーナ（角とかげ）のシチュー，メキシコはシエラマードレ山中の鹿の唐辛焼き。中米でCuajoと呼ぶ牛の肛門の煮込みスープは，二日酔いにも胃腸病にも効く絶品の手料理。ただしいずれも日本では材料難。

中国語

家菜

家で食べる料理や，簡単な料理は便飯，家常便飯，家菜などといいます。

庶民の便飯は，猪肉（ブタ），青菜（野菜），豆腐，麺などが主で，餃子，焼売，饅頭などは点心（おかし）といいます。

うまいものは烤鴨，魚翅（ふかヒレ），燕窩，珍しいものは竜虎鳳孫（それぞれ，蛇，猫，鶏，猿）を使った料理。熊掌は右と左で値段も異なります。そういう珍味を昔の金持ちは，おかかえの厨夫（コック）に料理させ，世間に張家菜（張家の料理）とか，王家菜とかいわれて得意がっていました。豪華な例は西太后。コックは200人を超え，食事毎に一人一碗，太后にまずいといわれたらムチ打ちの刑に処せられた，といいます。

人民公社では全員集まって食べることが多く，私がご馳走になったときは，ほんとうに便飯でしたが，慣れぬ草むしりの後だったためか，それとも彼らの真心を一緒に頂いたせいか，とてもおいしうございました。

ロシア語

кухня домашняя

奥さんの手料理といえば，とても蔭翳に富んでいる。谷崎潤一郎の「陰翳礼讃」ではないが，これほど醇乎として陰翳そのものともいうべき日本の表現を外国語にうつすのは，どだい無理というもの。

まず「手」という日本語の多様さがロシア語にない。「手鍋下げて」「手の長いひと」「手なぐさみ」「手なみのほど」「手なおし」「手なづける」「手がない」——まことに絢爛たるものだ。

次に料理ということばだが，こんどはロシアの方が豊かで，кухня（キッチン），стол（テーブル），блюдо（ディッシュ）と少なくとも三様のいい方があり，しかもそれがいわゆる婉曲法（euphenism）によっている。「厨房」あるいは「食卓」がとりもなおさず「料理」を意味するというわけ。

以上のような次第にもかかわらず「手料理」を無理無体にロシア語になおしてみれば，кухня домашняя すなわち「家庭厨房＝うちわの料理」というということにでもなろうか。

さて，ロシアのおかみさんはとても親切だし，客好きだ。ホテル住いの身で，このロシアの手料理を知らないとあっては，ロシア料理を語る資格はまったくない。

日本語

かつら

「かづら」は古い大和言葉である。『万葉集』に「鬘(かづら)」という文字が見られるし，「たまかづら」という枕言葉もある。昔,「かづら」は野生に長く這う蔓草(つるくさ)を編んで作った。その蔓(つる)のイメージから「たまかづら」は「絶える」「長い」という意味に結びつき，また，「かづら」のイメージから「懸ける」などの枕言葉となった。

大和舞の舞人が冠に紙の幣をつけて祭事に舞ったが，その紙の幣を「木綿(ゆう)かづら」という。いずれにしても，みやびやかなイメージである。ところが，昨今ではブラのボイン，狸のようなツケマツゲと並んで，「かずら」はニセモノの代表となった。「かづら」が「かずら」に変化したためだろうか。

「振分(ふりわけ)の髪(かみ)を短(みじか)み春草(はるくさ)を髪(かみ)に絡(た)くらむ妹(いも)をしぞおもふ」(『万葉集』巻11・作者不詳)—あの児は髪が短く束ねられないので，春草をかづらのように足して髪を束ねてでもいるのだろうか，そういえばあの娘(こ)はどうしているだろう…，というような意味だが，ニセモノはニセモノでも，昔は人の心の本元的なものに触れたような気がするのは，筆者だけだろうか。

英語

wig (ウィグ)
periwig (ペリウィグ)
peruke (パルーク)

かつら（wig）という単語は，中学時代に覚えて以来，実生活ではまったく無縁のことばで，他に，periwig とか peruke などもあるが普通 wig が一般的に用いられる。

元来，扮装用，実用，さらに威厳をもたらすために用いられたもので，17～18世紀にかけて，形も複雑になり，大きさや形で階級を表わすにいたった。英国では，今日も Judge's Wig や Barrister's Wig が裁判官や弁護士に用いられ，法廷の威厳発揚に役立っている。Bigwig が偉い人，大立者を意味するのもうなずける。また，wigs on the green は，つかみ合いで「かつら」が草の上に落ちることから，激論，けんか，そしてさらに，政争の結果などがもとで失職することをいう。そんな破目にあうと,「くそ！ いまいましい！」というときに,"my wigs!" "Dash my wigs!" と地団駄をふむようだが，「かつら」は冠のように大事なものだったらしい。

近頃，「かつら」ファッション到来か，美しくよそおいたい女心をねらって，宣伝戦たけなわだ。「かつら」は仮髪(かつら）で，所詮は，「仮面」に通じはしないだろうか。

ドイツ語

Perücke (ペリュッケ)

Second-House (Zweit-Haus) や Second-Car (Zweit-Auto) と同じように Second-Hair という英語的表現があるかどうか知らないが，ドイツでは Zweit-Frisur といえば誰しもまず，かつら（Perücke）を想い浮かべるに違いない。同じ Second（Zweit）でも Zweit-Rad（自動車の予備のタイヤ），Zweit-Schuhe（雨降り用の靴）とか，Zweit-Tashentuch（ご婦人の涙をふくための紳士のもう一つのハンカチ）といった，まことに合理的な Zweit もあるが。ともかく二重生活（Doppelleben）ではないが常にいまひとつの可能性（Zweit-Möglichkeiten）を求めることは楽しいことであろう。

Kleider machen Leute(馬子にも衣装）をもじって，衣装をかつらにおきかえ Perücken machen Leute ということがきかれるが，カーニバルの変装用のアクセサリーとは異なった機能をもっているのは確かなこと。事実，かつらをつけていても初対面ではそれが本物（Natur）かどうか見分けはつくまい。しかし，服をきるのと同じような気持でかつらをつけている人がいるだろうか。やはり扮装しているという感じを拭いきれない。

フランス語

perruque（ペリューク）

ヨオロップの，なかんずく赤毛のたぐいのご婦人（rousse），わがヤマトナデシコが緑なす黒髪に，あるいは軽きあるいは強き羨望のまなざしを投げることしばしばにして，某女にいたりしてはブロンド（blonde）近き髪をああ惜しやくろぐろとばかり染めぬき，小生久しきにわたり一杯食わされてありたること思いだすなり。しかるになんぞ，キョービのオナゴ，眼ン玉ばかりはどうにもならぬか相も変らぬ黒色ながら，あとはまあ上から下までカラアフル，ちょいとしたデパアトでも緑色のカツラまで並べておる。

それもよかろう，シアワセナラバ。さはさりながら，甲し上げたいぞ，諸姉各位よ，天然パーマの黒人婦人が，つまりはスチュワアデスなんぞの方々が，いかばかり髪を気にし，限りもなくペリュークを大事にしておることを知るならば，もそっと国内での使いっぷりをば改め，ドオシドシ輸出にまわすべきじゃあなかろうかと——。エッそれじゃあ外貨がたまりすぎるって——ヤレヤレ。

スペイン語

peluca（ペルーカ）

髪は pelo（ペーロ），かつらは peluca（ペルーカ）金髪の女性は黒やブラウンのかつらを買い求めるが，数からいえば，黒髪やブラウンの女性が自分の髪より色の浅いかつらをかぶって喜ぶ方が圧倒的のようである。金髪青目は単に紳士のお好みならず，ラテン女性のあこがれでもある由。男子用の方は色よりスタイルで，若い独身サラリーマン諸君が週末にこれでヒッピーに変装する。

筆者の駐在した某国では，市販のかつらは全量が密輸品なので輸入税を払っては香港，台湾はおろか韓国品でも競争できない。密輸の親玉は国防長官で，息子の空軍大佐が軍用機でサンディエゴから運び，商売大繁盛であった。もっとも，その国では，はびこる密輸の一大粛清を本格的にやったところ，大親玉は大統領の婿さん自身であったので，粛清の責任者だった大蔵大臣が辞任せざるを得なかったが，米国あたりでは“スワ，ペソ切下げ”という噂まで本気にされたというおまけがある。

こういう国相手にトーシローがなんだかんだと日本の事務所で理屈をいっても，現地では通用せぬこと明々白々。それにしても人間の欲望の前には，法律も道徳もないという平和時代の怪談物語。

中国語

假髪（ヂァー ファー）

かつらというものは，古くペルシァに始まり，エジプト・ギリシャを経て西欧に入ったものの如くであります。ペルシァから東行して中国にいつ入ったか詳らかではありませんが，中国語でかつらを假髪とか假頭（ヂァトウ），假頭髪などと即物的でムードのない呼び方をする所をみると，さほど由緒ある代物とも思えません。閻王（イェンワン）（閻魔様）が判決を下すときに，イギリスの判事のようなかつらをかぶったとも聞かないし，孔明（クンミン）が仲達（チュンダー）を走らせたときにも，木像にかつらを用いたとは書いてありません。ただし，京戯（チンシー）の悟空（ウーコン）はやはりかつらを被っていたように記憶するし，それが翻跟頭（ファンゲントウ）（トンボガエリ）するときにも落ちなかった所から，かつらを作る技術は発達しているとみえます。

かつらの現代的意義は更に薄く若い女性もかつらどころのさわぎではないでしょう。あるとすればビニロンの頭髪の発達で，ひところはプレミアムまでついた中国産人髪が売れなくなり，ニクソン氏が買うや否やはイギリス人の賭けの対象になるかもしれません。

ロシア語

парик（パリク）

18世紀のヨーロッパでは男がなかなかおしゃれであったようだ。王侯貴人の肖像をみれば彼らが首にスカーフを巻き，あたまにはかつららしきものを戴いているさまがみえる。演劇という目と耳の文化もどうやら宮廷から起ったものらしく，今もその跡が王立・国立劇場などという名で残っている。花森安治ではないが，男がスカートをはいたっていいんだし，その方がまっとうだということはすでにかつらで示されているというわけか。

ロシアでも御多分に漏れず парик（パリク）（かつら）は宮廷劇場と結びついている。ドイツ・フランスに対して後進国であるロシアは帝王までもそちらから輸入していて，ロマノフ王家にロシアの血が一滴もないという次第。かつらもまるまるドイツ語 Perücke から入ってきている。さしずめ散髪屋は Perückemacher（ペリュケーマヘル）つまり“カツラ拵え師”である。ウーマン・リブを完全実施したという国ソ連でこそまさにまっさきに男がカツラをかぶっていいと思うのだが，目先は生産増強に忙しく，アタマの先へは手がまわりかねているらしい。

日本語

断絶

「ことば」とは本来，人の意思を音声で表現する口ぶりであって簡潔であるべきだ。島国の日本では，中国大陸や朝鮮半島の影響はあったものの，むかしことばは単純で明快で，すこぶる美しいものであった。

西欧文明の影響を受けはじめた近世になってからであろう。ことばは「言語」などという複合造成語におかされ出した。「ことば」はもちろん人が造った記号ではあるが「言語」となると人間の似非人造記号だと思う。これが「断絶」のはじまりではなかろうか。

いったい，どうして「断つ」とか「絶える」だけではいけないのだろう。どうして同じ意味の文字を重ねねばならないのか。文字通り人は文明の開花とともに感受性を失いつつある。

「恋愛」も然り。恋うるとか，惚れるではなぜ悪いのか。人に惚れるということは，うまくいいあらわせないけれども，恋愛することとはチト違うように思えてならない。文明とともに人はマが抜けてくるからか，人に間を入れて，「人間」なんてことばを造りおった。

英語

ディスコンティニュイティ
discontinuity

ギャップ
gap

「断絶」といえば，浅野内匠頭の殿中における刃傷——お家断絶——義士の仇討ちなど講談の筋を連想するほど古いことばだと思っていた。そのことばが，数年来，大流行しているが，現代を定義したP. F. Drucker 教授の著書，『断絶の時代』が広く日本に紹介され，ベストセラーの一つになってからのことだ。原題は“The Age of Discontinuity”である。「豊かな社会」を謳歌する時，「断絶」というキビシイことばは，読者に強くアピールし，たちまち現代の代名詞のごとく用いられている。高年層と若者の考え方，道徳観，生活感情など，いわゆる生き方に，驚くべき懸隔があることはどうにもならず，「世代の断絶」—“generation gap”—といわれる。家庭，学園，会社等々で身近に多少の差こそあれ，年代格差を実感しない環境はまずあるまい。しかし，この事実は今日になって始まったことではなく，またひとり日本だけのことでもなく，いつの時代にも人間社会とともに起きていた現象のようだ。——“History repeats itself.”—。

ドイツ語

ブルッフ
Bruch

戦後のドイツで，一般社会現象にみられる「断絶」はその程度に於て日本よりもひどいといわれる。これは一つにはナチスに支配されていたことによるといえよう。昨今日本では軍歌がさほどの抵抗もなくきかれているようだがドイツではナチス時代を想わせる軍歌の如きものは，まずほとんどきかれないといってよい。

現代のドイツの若い人びとはその心を感動させるような響きをもった祖国という言葉を知らない。彼等は過去の重いヒポテークを負わされている。昔の青年が好んで口にしたIdeale（理想）なるものも今日の若い世代はよせつけない。そしてむしろkonkretistisch（現実的）であるといわれる。共同生活でもFreundschaftとかKameradschaftとかといった友愛精神はなくなりPartnerschaft（パートナーシャフト）がこれに代った。さりながら以前家庭での緊張の種となっていた所謂世代間のGegensatz（対立）は今日それ程の意味はなくなっているのではなかろうか。現実的な今日の若者に必要なのはabstrakt（形式的）な規範ではなくlebendig（生きた）な範例であり，ここに家庭での結びつきの新しい一つのチャンスがあるといえよう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com